



北畠親房 篇3

北畠親房 終焉の地

南朝は、中心的人物であった北畠親房が亡くなると徐々に勢力が衰えることとなりますが、北朝との戦いは続きました。北朝と講和する動きも南朝内ではありましたが、後村上天皇は、それに反対したまま崩御しました。講和できないまま月日が過ぎましたが、室町幕府三代将軍 足利義満の主導によって、元中9年（1392年）に講和（南北朝合体）が実現し、新たな時代を迎えることとなります。

時代は、少々、戻りますが、親房の三男 顕能は、初代の伊勢国司として、南伊勢地方を拠点に活躍しました。正平5年（1350年）に大和国を攻撃、正平8年（1353年）には宇陀をその勢力下に治め、宇陀三将の秋山・澤・芳野氏をはじめとする地侍は、北畠氏の配下となりました。伊勢国司北畠家は、天正4年（1576年）に、織田信長によって滅ぼされるまで、伊勢国、志摩国、伊賀国、宇陀郡を領地としていました。北畠氏にとって、宇陀は重要なところだったのでしょう。

北畠氏は親房を筆頭に南朝の中心勢力として活躍し、今も市内には親房ゆかりの地がいくつかあります。灌頂寺跡（榛原福西）には「北畠親房公終焉の地」と刻まれた顕彰碑が建てられています。

